

「お姉ちゃん？ どうしたの、こんな遅くに」

「助けてえ、会社に鍵忘れて家に入れなくなつちやつたんだよお……」

少し背伸びして借りた、完全防音の新築マンション。

その一室、締め出されたドアの前で情けなく三角座りをし、泣きながら妹に電話をかけているのが、今の私だ。

「お姉ちゃん……。助けてあげたいけどさ、もう電車ないから無理だよ。近くにホテルとかないの？」

「うう……。漫喫なら……」

「じゃあそこに居な？ 会社行く前に着替えたいなら、朝うち寄つていいから。ほら、もう

眠いから切るよ」

「わかつたけど……あつ待つて切らないで心細いよお、ああっ」

……切られてしまつた。

私としたことが、フォロワーの推し語りの飲み会で浮かれて、家の鍵を会社に忘れてき

てしまったのだ。

飲み会は終電ギリギリまで楽しんでしまった。もちろん会社は閉まつていて、明日までは鍵を取りに行けない。

絶望しながら数駅先に住む妹に電話をかけたというわけだつた。

「はあ……しゃーない、漫喫行くかあ……」

どうしようもない。家のベッドでのんびり推しのボイスを聞きながら眠れないのが惜しくはあるが、近くの漫画喫茶で快活に過ごさせて貰いますかね……と立ち上がつた時だつた。キイ、と遠慮がちに隣の扉が開く。

「——あの、すみません。お話……聞こえちゃつて。良かつたらんですけど、僕の……使つてない部屋、お貸ししましようか……?」

天使のような言葉と共に、天使のような顔がこちらを覗き込んできた。

# お隣の激メロ お兄さんに

ピンチを助けてもらった  
だけのはずが実は推しの  
ボイス配信者だった彼に

# Sっ気たっぷりの 甘々クリ責め で陥落させられる話



ろこもこうさき

絢辻 透

「はつ、え、へ、部屋！？」

「はい。僕、こないだ引っ越してきたばかりなので、部屋ひとつ余らせちゃってて。使つてないソファーベッドが置いてあるので、朝まで身体休めるくらいはできるかなと、思うんですけど……」

玄関ドアから顔を出して、どこか遠慮がちにこちらの様子を伺うこの天使のようなイケメンは、高瀬 蒼真（たかせ そうま）さんという、こないだ越してきたばかりのお隣のお兄さんだ。

ピンクがかつたベージュの髪は、似合う人が限られそうな明るさなのに甘い顔立ちに完璧に似合っている。細身のシルエットも相俟つてアイドル然としたルックスだ。

そのイケメンに、あの情けない会話を聞かれてしまつたらしい。

「えつ、あ、聞こえて……！？ すみません私うるさかつたですよね！？」

提案されたことの前に、会話を聞こえちゃってたんだ、絶対迷惑だった、恥ずかしい……！  
とぐるぐる脳が高速回転する。

高瀬さんはそんな私を見て申し訳なさそうに眉を下げた。

「いえ、たまたま置き配の荷物取ろうとしたタイミングだつたんです。それで大変そうになつて……でも、その……知らない男の部屋に入る——なんて、危ないし迷惑でした、よね……すみません」

「あついえ！ ち、違くて、びっくりしただけで迷惑だなんて……いや、というか、いいんですか、そんなの……！？」

提案自体はありがたい事この上ないが、私なんかがこんなイケメンの部屋に上がらせてもらうなんて迷惑ではないだろうか……と考えてしまう。

慌ててどもりながら返事をすると、安心したようにふわりと笑みを浮かべられた。

「良かつた……もちろん。坂崎さんが、嫌でなければ」

「嫌なんてとんでもない、ありがたいんですけど……ただその、か、彼女さんとかは……大

丈夫なんでしょうか！？」

「あははっ、居たら流石に声かけてませんよ。坂崎さんこそ、彼氏さんは大丈夫ですか？」  
「アツハイ、私も……あの、居ないので……はい……すみません……」

笑いながら聞き返されて反省する。とんでもなく失礼な質問をしてしまった。  
縮こまりながら玄関を通してもらうと、まだ新築の、木の匂いが少し残っていた。

「間取り一緒だと思いますけど一応……トイレはここで、洗面所はこっちです。自由に使つて頂いて大丈夫ですから」  
「はい、本当にありがとうございます……！」

（……引っ越したてで物が少ないんだろうけど、それにしても綺麗だな……）

インテリアだろうか、オシャレな雑誌や観葉植物なんかが置いてある。間取りは一緒なのに、漫画やらグッズやらでいっぱいの私の部屋とは大違いだ。  
廊下を抜け、ソファーベッドが置かれた部屋に案内してもらう。

部屋は言つて いた通りまだ何もなく、ソファーも使つた気配がほとんどない。ただ置いただけ、という感じだつた。

ありがたく荷物などを置かせてもらう。

「机や棚もまだ無くて……こんな所で申し訳ないです」

「いやいや、居させてもらえるだけでありますから……！」

「ベッド使つてくださいね、広げるとそこそこの大きさになるんで……あ、着替え必要か。

新品の服あつたよくな、ちょっと待つてくださいね」

「えええ！？　いやいや、おかまいなく……！」

私の制止もむなしく、高瀬さんは部屋に行つてしまつた。

がさごそと音がして、本当にいいのに……と思つて いる間に「あ、あつたあつた」と声が聞こえる。

「ちよつとサイズが僕用なので大きいかもしないんですけど、Tシャツと、こつちはスウェットなんんですけど、ウエスト合わないかなー……？」

「そ、そんな本当に大丈夫なんで、……えつ……？」「…………ん？」

高瀬さんが持つて来てくれたTシャツ。その胸元のロゴに、見知ったデザインがあつて思わず声を上げてしまつた。

恐らくあまり一般的ではない——というよりは、そのTシャツを持つてているとしてもほとんどの女性だろう。

それは私の推しボイス配信者「あおくん」のロゴだつた。

「あおくんの……ロゴ……？」

「…………えつ、し、知つてたんですか…………！」

「知つてるつていうか、めちやくちや推してますよ！？」

「ほ、ほら……つ」

高瀬さんにスマホの裏側を見せる。透明なケースの中にはあおくんのステッカーを入れていた。可愛いSDキャライラストと共に、Tシャツと同じロゴが入つていて、どうしてTシャツを持つているのだろう。声は似ていてるけど違うトーンだし、まさか本

人じやないだろうし……と顔を上げると、ほんのりと頬を染めた高瀬さんが戸惑いと嬉しさを滲ませた表情でこちらを見つめていた。

一泊置いてから、高瀬さんはこう言つた。

「坂崎さん……僕のこと、推してくれてたんですか……？」

一旦、状況を整理したい。

お隣の超絶イケメンくんが、私の推し配信者であるあおくんだつた件について。

いや、それはまだいい。超展開ではあるが辛うじて受け入れよう。

(……それで何で私は、あおくんのTシャツを着て、あおくんの隣で、あおくんの配信について話してんの……つー?ー?ー?)

「あ、最近のやつ、これもお気に入り入れてくれる。これはどんなところが良かつたですか？」

「えっと、これはその、あの……エピソードトークの時の笑い声が良いな、って……」「ほんとに？ あんまり笑っちゃうと耳うるさいかなーって思つてたんですけど、そういうのもアリなんだ」

私は全然状況を飲み込めていないというのに、高瀬さんは相変わらずニコニコしながら話しかけてくる。

普通、隣に住んでる上に鍵忘れて騒いでるような女が自分のファンだつたら嫌じやないか？ と冷静に思つてしまふのだが、全くそんなことはないらしい。

(さつきからすんごい、嬉しそうなんですけど……！?)

浮き足立つた様子で着替えたら少しお話聞かせて下さい、と言われて十分後、この有様だ。

ソファーベッドに並んで座り、私のスマホでファンサイトの履歴を表示させられながら、延々と推しポイントを聞かれている。

「コメントもしてくれてる……あつ、NANAさん！？ 坂崎さんってNANAさんなんですか、僕覚えますよ」

「へあ……！？」

「初期からよくコメントくれてたじやないですか、NANAさん。うわー……こんなことあるんだ、嬉しい……」

まさか認知されてたなんて。綻ぶ顔が眩しくて目が潰れそうだ。

高瀬さん——いや、「あおくん」は、大手動画投稿サイトやファンサイトで活躍するASMRボイス配信者だ。

活動初期から応援していたものの、少し前まであまり再生数が伸びなくて、コメントも少なかつた。

もつと評価されるべき……！ と思って毎回のようにコメントしていたが、最近はいわゆる「見つかった」状態で、ファン数も再生数もうなぎのぼり。

寂しい気持ちも少し抱えつつ、人気が出て良かつた、ずっと応援するからね……！ と、給料日に課金と共にコメントをするくらいになっていたのだが……。

「最近NANAさん、コメント減つてたから……飽きちゃったかなって思つてたんです。でもちやんとお気に入り入れてくれてて……そういう訳じやなかつたんですね、良かった」「ち、違います、最近はコメント増えたから……反応とか大変かなつて……！」

「全然そんなことないですよ。うわー、そつか、本当に嬉しいな……」

高瀬さんは呟きながら隣で自分のスマホを取り出して私のコメントを確認しはじめた。死ぬほど恥ずかしいが、アカウントが確かに「あおくん」のアイコンで、今更ながら、ほ、本物だ……と頭が真っ白になる。

「それにしても、こんなに聞いてくれてるのに……坂崎さんは僕のこと、全然気付かなかつたんですね？」

「そ、そりや隣に住んでるなんて思いませんし！ ボイスの声と普段の声って結構違うじゃないですか……！」

「…………そつか」

少し眉を下げる高瀬さんが私を見る。気付いて欲しかったのだろうか。さすがに無理ゲー  
だが……!? と思っていたら、少し屈まれて距離が近付いた。

毛穴ひとつすらない綺麗な顔に、ひゅつと喉が鳴る。

思わず身体を引こうとしたけれど、背中を柔らかく抱かれてせき止められてしまつた。

「じゃあ——こんな感じの、いつもみたいな声がいい?  
「ひええ……っ！？」

息遣いすら感じる距離感で毎夜聞いているあのトーンが、耳に吹き込んでくる。

「ふふっ……かわいい反応。やつぱりこういう感じが好きなんですね  
「む、むり……つちよ、むりですつてえ……！」

今まで声色が違つたからか、高瀬さんとあおくんをどこか別のものだと認識していた

気がする。

けれど聞き覚えのありすぎる囁き声を出されて、本当に同じ人なんだと意識した途端に——身体が燃えるように熱くなってしまった。

「すごい、顔真っ赤になっちゃいましたね……。僕ね、越してからずっと……あなたのこと、可愛いなあ、って思つてたんですよ」

「へ……っ？ そ……っそんな、私が、そんな、わけ……っ」

「本当ですよ。引っ越しの挨拶した時も、すれ違う時も笑顔でいてくれて。その上、僕のボイス好きでいてくれたなんて……本当に嬉しい」

毎日のように聞いていた声音が耳に直接吹き込んでくる。

どうしていいかわからずに固まっていると、心配げに顔を覗かれてしまった。  
憂いを帶びた瞼が瞬く。

「あ……もしかして、僕……イメージと違いましたかね。幻滅、しちゃいましたか……？」  
「えつ！？ あついや、いやいや！ むしろ、こんな格好いい人だつたなんて、って気持ち

で……！」

「本当ですか？ 格好いいって、思つてくれてたんだ……良かつた」

高瀬さんは安心したように呟きながら、私のスマホをそつと取つて床に置いてしまつた。何も持たない手に、暖かな手が重なる。

「あ、あの、待つ……これは、えつ、あの、どういう……！？」

「……ごめんなさい、ファンの子にこんなことしちゃうの、よくないなーって思うんですけど……元々僕、あなたのこと可愛いと思ってたから……嬉しくて、抱き締めたくなっちゃつて。嫌、ですか……？」

嫌とかそういう問題じやなくて、まずその耳元で甘く囁くのをやめてほしい。でないと身体の力が抜けてしまう。

何も言えないでいると、くすっと笑われて背中に回した手に力を入れられた。バランスを崩して、ぼすん、と高瀬さんの胸に凭れてしまう。

「ん、んむ……！？」

「ふふ……ね、坂崎さん。僕のボイスって、有料のやつで、恋人っぽい雰囲気のやつもあつたと思うんだけど……聞いてくれてました？」

「うえつ、そ、そりや、全部聞いてるので……つ」

「嬉しい……じゃあ、こうやつて……抱きしめて、耳とか、ほっぺにキスしたりしてるやつ、覚えてる？」

「あ……つ！？」 ちよ、待つ……覚えて、ますけど……！」

ちゅ……♡ と、リップ音と共に耳の外側を柔く食まれて思わず高瀬さんの服を掴んでしまつた。

覚えてるも何も、お気に入りで何度も聞き返しているボイスだ。

終始甘い雰囲気のセリフが声にすごく合つていて、有料だけれどすごく人気のボイスだ。まだ眠くない夜には、いつも流していた。

「あのボイスの……最後のとこ、覚えます？」

「くくく、それはその、ちょっと、私の口からは……つ」

「ふふ、覚えてくれてるんですね。本当にたくさん、僕の声聞いてくれてたんだ……」

耳元から、こめかみに。そして頬へ。固まる私の顔にちゅ、ちゅ、と柔らかい唇が何度も触れては離れていく。

このままだつたら、あのボイス通りだつたら。そう思つて身を引こうとしても、思つた以上に強い力で抱き寄せられていてどうすることもできない。

「――目、閉じて」

同じトーン。同じ声。

イヤフォン越しに何度も聞いてきたその言葉が、直接吹き込んでくる。

戸惑う私をじつと見つめたまま待つている様子に、耐えきれなくてきゅつと目を……閉じてしまった。

「……ふふ。あなたって、本当に……かわいい」

ちゅ……つ♡

柔らかくて熱い唇が重なる。

キスなんて、いつぶりだろうか。社会人になつてからは推し活ばかりで浮いた話もなく、だからこそあおくんの甘めのボイスに癒されていたのに。

本人にキスされているなんて、とても信じられない。夢だとしても都合が良すぎる——

そう思つてゐる間にも、何度となく唇が押し付けられてゐる。

「（ちゅ）つ、んう……つ待……たか、せさん、んん……つ！」

「坂崎さん……ごめんなさい。ちよつと僕、止められない、かも……」

「んう、……へつ、えつ……つんむ……！？」

ちゅ、ちゅつ、れろ……♡

熱っぽく掠れた声が頭を灼く。様子を見るように柔らかく何度か吸われたあと、驚いて少し開いた口に舌を差し入れられてしまつた。

（あ……やば、頭ふわふわする、これ……つ）

甘くも激しくなるキスに力が抜けていく。支えるように回された手が気付けば腰元を柔らかく撫でていて、あ、逃げられないかも、と他人事のように思う。

「ん……キス、気持ちいいですか？ これだけで、そんなに顔とろとろにさせちゃって、たまんないな……」

「へ……？ あ……あ、うそ、待つ……ひや……！」

「やつぱり耳、弱いんですね……ここにもたくさん、キスしたいな……」

ちゅ、ぢゅ……つ♡

すり……もにゅもにゅ……♡

ようやく唇を開放されたと思ったら、耳元を吸われながらTシャツごしに柔く胸を揉まれる。このまま寝るだろからと何も考えずにブラジャーを取つてしまつたのを思い出して、恥ずかしさに身体を震わせると、どこか欲を孕んだ吐息が聞こえてきた。

「待つ、そ、そこだめです、高瀬さ……っ！」

「男の家に上がって、下着取っちゃったんですか？　ちょっと危なっかしいですね、あなたって」

「ひや……っだ、だつて……うあつ、あつ♥　んん、だめ、高瀬さん……！」

「その上、キスだけでそんなにとろけた顔して、甘つたるい声上げちゃって。それってもう、どうぞ食べてくださいって、言ってるようなものですよ……？」

すりすり……カリッ♥

カリカリカリカリ……♥♥

胸元を這つていた手が登頂部に近付き、いともたなすく乳首を見つけてしまった。  
わずかに伸びた爪先でTシャツ越しに引っ搔かれてぞくぞくと腰元に熱がたまっていく。

（ううつ、た、確かにブラ取つちやつたのは迂闊だつたけど……！　聞き覚えありすぎる声で囁かれるから、無意識に身体ぞくぞくしちやつて……喜んでるみたいになつちやうだけで、あ……♥　だめ、そこ、先っぽカリカリされると、頭、ばちばちして……つ♥）

「は……う……つ♥　だ、だつて……高瀬さんの、こえ、が……つあ、だめ、それ……つ

♡」

「僕の声のせい？ ふふ、それなら嬉しいな。他の人には、こんなにとろとろの顔になつて、あまーい声出しながら乳首勃起させて、誘つたりしないって事ですもんね……？」

きゅ♡ カリカリ♡

こりこりこりこり♡

ふく……♡ と勃ち上がった乳首を、からかうみたいに引っ搔かれる。それだけでぶるぶると身体が震えてしまうのに、先っぽに爪先を埋め込むみたいにしてこりこりといじられて身悶える。

「あつ、……づ♡ ひ、んう、ん／＼……つづ♡♡」

「ふふ、坂崎さんの乳首、僕の指食べちゃったね……。えっちな声可愛い……ねえ、もつと聞きたいで、我慢しないで……？」

「やつ、♡ へ、へんな声、だから……も、やあ、あつ♡ 待つ、うう……つ♡♡」

「変じやないよ、エッチで可愛い、本気で感じてる声……こっち触つたら、もつと聞かせてくれますか？」

するする……  
♥

腰元を這つていた手がゆるゆるのスウェットの中に入り込む。高瀬さんのサイズのそれはやつぱり私には大きくて、辛うじてお尻のところで止まっているだけだったから……あつさりとお尻に辿り着き、長い指が太ももにまで這わされてしまつた。

「ひやつ！？ 待って、そこだめ……ツ高瀬、さん♡」

んー……？ ふふ、うーん……どこがダメ、ですか？』

うえ……そ、その……あの、お尻の、とこの……」

「お尻、もう触つてないですよ？」 ちゃんと言つてくれないとわからないです。ねえ、どこがダメ……？」

すりすり  
♡

絶対分かつてゐるのに、指先は意地悪く内ももの少し凹んだところをなぞる。どうしよう、何て言えば……と思つていたら、不意に鼻先同士が触れ合つた。

ちゅ……  
♥ と、また口付けられる。

「んう……つ♥ んむ、う……あ、だめ、あつ、／＼／＼つ♥」

——ピと♥

こすこす♥ すりすりすりすり……つ♥

直接的な言葉を言えないうちに、指が……パンツの、おまんこの割れ目に辿り着いてしまった。じんわりと熱を持つたそこを何度も往復されてたまらない気持ちになる。

「ねえ坂崎さん、どこがダメ？ 教えてくれないと、やめられないですよー……？」

「んうつ、／＼つづ♥ そ、そこ、今触つてるとこお……つ♥」

「この、熱くなつてじんわり濡れてるここ？ ここ、なんて言うんですか……？」

「ひ、んん……♥ ／＼／＼つうう……つ」

すりすり♥ れちゅ

くちゅくちゅくちゅ……♥

口を噤んでいる間に、パンツ越しに入口へ指を埋められる。滲んでいた愛液が溢れてし

まつて水音が立つて恥ずかしい。

その間にも何度も、恋人みたいにちゅ、ちゅ、と口付けられていて、頭がどんどんぼんやりしてしまった。

「恥ずかしがつてるの、可愛い……言えない？ ふふ、坂崎さんが今触られちゃつてること……ね、おまんこ……つて言うんですよ。ほら、言つてごらん？」

「ひ、う♡ うううつや、恥ずかし……つんあ、あつ♡ だめ、そこだめ、ああつ♡」「ここ好き？ ああ……好きみたいですね、パンツの上からでも分かるくらいコリコリして、触つて触つて♡ つてしてる。ここはね、クリトリス、つて言うんですよ……♡」

カリカリ♡ カリカリカリ♡

逃げを打つ腰を抑えられて、わずかに膨らんでいたクリトリスを布越しに引っ掻かれて、甘えたひどい声が止まらない。

（だめ、だめなのに♡ こんな、たとえ推しにだつて……こんなこと、されちやつたらダメなのにつ♡ おまんこくちゅくちゅいじられて、クリカリかりされて♡ きもちよくて、

全然抵抗できない♡ いつも聞いてる時より甘ったるい囁き声で名前呼ばれて、えっちなこと言われるの、むり……つ♡)

「ひ、いっ、うう～～つ♡♡ つあ、うあつ♡ そ、んな、あつ、いえ、いえないい……つ♡」「そつか……言えなかつたら、やめてあげられないですね……こ、もうビンビンに勃起したクリトリスに、坂崎さんのえつちなおまんこ汁なすりつけちやうけど……言えないから、しちうがないですよね……♡」

ぬちゅ……つ♡

ぬる～つ♡ ぬる～つ♡ ぬりゅぬりゅぬりゅ♡

ぬるついた指で何度もクリトリスを撫でられて、気持ちよさにかくかくと腰が揺れてきてしまつた。

快感に流されかける頭を振つて、恥ずかしさをこらえながら口を開く。

「んう、うつ♡ うう～～……つたかせ、さあん……つ、わかつた、から♡ いう、も……いうからつ♡」

「んー……？ ふふ、うーん……高瀬さん、おまんこいじつちやだめえ♡ つて……言え  
る？」

「うう……たか、高瀬さん、つ♡ お、お……おまんこ、い……いじつちや、だめ、で  
す……つ♡」

「——つ」

必死に言つた途端、息を詰める気配がして恐る恐る上を向く。

熱っぽく頬を上気させた高瀬さんと目が合つた途端、どき、とソファに押し倒されてし  
まつた。

色素の薄い髪がぱさりと音を立てる。

「……ちょっと、かわいすぎますね、あなたつて……」

「な、なに……つああ！？♡ だ……め、つて、いった、のに……やつ、直接、つあ、やあ、  
あ～～～つ、つ♡♡♡」

ちゅこちゅこ♡ しこしこ♡

しこしこしこしこ♡♡

息を詰めたどこか余裕なさげな掠れ声が聞こえてすぐ、パンツの中に手を差し入れられて直接クリトリスをしごかれてしまった。

強すぎる快感に濁った声が出る。逃げを打つ身体を追いかけるように片手で抱きすくめられた。

「真っ赤な顔で腰へコつかせて……気持ちいいの丸わかりなのに、一生懸命えっちな言葉言つて……興奮させるの、上手すぎます……」

「……そ、そんな、つもりじや、つああ♡　お、おしえたら、やめるつてえ、んんつ♡」「ふふ……うん、この濡れ濡れのおまんこいじるのは、やめますね。クリトリスだけ……こうやつて、ちゅこちゅこしてしごくんで、こっちで気持ちよくなりましょうね……♡」「やつ、やあ、そんな……つあああつ♡　だめ、そこも……んう～～……つ♡♡」「

ちゅ～～……つ♡

ちゅこちゅこちゅこ♡　しこしこしこ♡

すっかり勃起してつまめるようになつているそこを、ぬるぬるの指で何度も扱かれて足

先に力がこもる。

慌ててそつちもダメって言おうとしたのに、塞ぐように唇を奪われて何も言えなくなつた。

（だめ♡ キスだめ♡ 頭ふわふわしてきちゃう、あまーい声でいじわるされて、クリしごかれて♡ だめなのに、絶対こんな……もう、きもちよすぎてクセになつちやうのに♡ きもちよくて訳わかんない、あ、あ♡ このままイきたいくて思っちゃう、腰揺れちゃう……つ♡）

「ふ……唇、震えてる。もしかして、イきそうなの我慢します……？」

「～～～つうう……つ♡ だめ、なのにい……うあ、つあ♡ つま、つまむの、や、ああ……つ

「うん、うん……ダメなのに、気持ちよくてイッちゃいそうだね……♡ かわいい、坂崎さん……いいよ、いくとこぜーんぶ、見てるから。ね、クリちょっとしごかれただけでアクメしちゃうとこ、僕だけに見せてください……？」

ぬりゅぬりゅつ♥

こりこり♥ こりこり♥ こねこねこね♥

興奮した囁き声を聞くほど頭に火花が散る。イキそうにひくつく身体に合わせて何度も繰り返し捏ねられて高まつていくばかりだ。

止めようもない喘ぎを愛おしげに聞かれて、いよいよ視界が真っ白になつた。

「つうあ、あ、むり、たかせ、さあん♥ も、あ、きちやうう……つ♥」「

「うん、きちやうね……ふふ、いいよ、クリいっぱいしごかれて、きもちよーくいこうね。ああ……すごいな、えつちな顔かわい……ん、もういくね、イつちやうね……♥」「ああっ、～～つひ、うう♥ だめ、イつちや……たか、せき……ついくう、うう、ああっ、

～～～～つ♥♥」

びく……つ♥ びくびくびくつ♥

背筋を思い切り逸らし、足先までぴいん……つ♥ と伸ばしたえつちな体制のまま、導かれるようにしてイつてしまつた。

イつている最中、ずっとクリトリスを指で抑えられていて、それがまた気持ちよくて絶

頂が長引く。イキきつたあとも、余韻でぴくぴくする身体をぎゅっと抱きしめられて頭の中がふわふわしてしまった。

それなのに。

「あー……かわいい、ほんと……ごめん、坂崎さん……ちょっとしんどいこと、しちゃうかも。ごめん、ね……？」

「へ……あ、あ、あっ！？ ま、つて、つ！？♡♡ だめ、たかせ、しゃ、今ダメえ、ほ、ほんとに、いっ♡」

すりゅすりゅ……つ♡

イッたばかりで敏感なクリトリスを、また撫でられて腰がビクついた。敏感すぎて快感よりもつらさが勝つ。

縋るように顔を上げると、興奮しきった視線とかち合つた。

「僕ね、もつとあなたのえっちな声聞きたいんですけど……でも、おまんこ触っちゃダメでしょ？ だからクリ触るしかなくて。おまんこいじつてもよかつたら、やめてあげられる

んですけど……」

「そ、つああ♡ だめ、くり、うああつ♡ くり、づらい、から♡ も、たかせ、しゃん、ゆるして、え……つ♡」

「うん、うん……つらいですよね……許してあげたいです、僕も。だから、ね、おまんこ、いじつていい……？」

甘い声でとんでもないことを言われている気がする。するけれど、ずっとちゅこ♡ ちゅこ♡ とイつたばかりのクリトリスを撫でられていてもう何がなんだかわからない。腰が引けるのも抑えられていて逃げ場がない。

とにかくやめてほしい一心で、こくこくと頷いた。

「うう、い、い、も、いいからあつ♡ くり、やめてえ……つふあ、あ……あああつ！？♡」

ずぶ……つ♡

ぬちゅ♡ ぬちゅ♡ ぬぶぶ……♡

頷いた途端びたりと止んだ刺激にほつとしたのも束の間、ぬりゅん♡ と濡れそぼつた

おまんこに指を這わされる。

だめ、入つちやう——そう思つておなかに力を込めたのに、何の抵抗もなくナカへと侵入されてしまった。

「つああ……すごいな、坂崎さんのナカ、とろとろなのに……指一本でも、キツキツですね。もしかして、こういうの……されたこと、ないですか？」

「はつ、ひ……♡ な……ないです、ないから、やめ、つあ、んん／＼……つ♡」

「僕が初めて……？ そつか、そうなんだ。嬉しい……痛かつたら、教えてくださいね。あなたのこと、気持ちよくしたいだけだから……」

ぬふ♡ ぬふ♡

ぬちゅぬちゅぬちゅ♡♡

ナカをゆつくりと割り開かれる。粘ついた水音と共に入り口を何度も往復されて、ようやく受け止めきれるだけの快感が訪れて体が震えた。

意地悪なのに声音は甘く、指先は優しくて、頭がとろけていく。

縋るように抱きつくと、愛おしげな視線と共にキスが降つてきた。

「ん、んう＼…………ふう、う、う＼…………つ♥」

「ん……ふふ、声もとろけちゃいましたね、坂崎さん。すっごく可愛い……大丈夫？ 痛くない？」

「うあ…………？ あ、えっと…………いたくは、ない…………です…………つあ、うあ、あつ…………♥」

「良かつた…………ああ、ここ気持ちいいですか？ このざらざらしたとこ撫でると、入り口きゅうきゅう締まりますね…………」

こりつ♥

こりゆこりゆこりゆ

お腹側の、触られるたびに声が出てしまうところを何度もこすられて、はつはつ♥ と犬みたいな声が出る。やめてほしかったはずなのに、さつきクリトリスをいじられたせいで絶頂感が引かなくて、もつと強い快感を求めてしまう。

こんなにすぐイきたがつてのをバレたくなくて顔を背けると、今度はいつものボイスよりも熱のこもった囁き声が鼓膜に響いてきた。

「ダメ、堪えないで？ 僕におまんこのナカぬぽぬぽいじめられて気持ちよくなつてること、ちゃんと意識してください……？」

「くくくやつ、やあ、あつ♥ むり、むり、です、そんな……んんつ♥」

「どうして？ 僕しか見てないですよ、ほら、さつき言つたからもう言えますよね。おまんこ気持ちいい♥ って、言つてごらん？」

「や、ああつ♥ そんな、はずかしつ……うあつ、あつそこ、ぐりぐりだめ、だめえつ、ああつ♥」

(さつきいつたのに♥ いつもひとりでしてるときは、いつたら終わり、なのに♥ きもちいいのず一つとされて、またいたくて腰かくかくするの止めらんない♥ あおくん、いつも、ボイスではもつと優しい感じ、なのに……♥ おんなんじ声で意地悪なこと、言われて♥ なんでこんな、興奮しちやうの……つ♥)

ぬつぽ♥ ぬつぽ♥

くりゅくりゅ♥ とちゅとちゅとちゅつ♥

弱いところを繰り返し責められていよいよ腰が浮いてくる。自分から触つて♥ つて言

うみたいに高瀬さんの手に押し付けてしまって恥ずかしいのにやめられない。  
甘い声と指に掻き回されて、次第に、きもちいい、イきたい、しか考えられなくなってしまう。

「ふ……ぼーっとして腰振つての、えつちすぎますね……。坂崎さん、ここ気持ちいい……？」  
「あ、あつ♥ ん、ううつ……き……、……つきもち、い……つ♥」

「ふふ、いい子……うん、ここね？ 坂崎さんがくちゅくちゅいじめられちゃつてること  
——おまんこ、だよ。坂崎さん、おまんこ、気持ちいい……？」

「——う、う……つ♥ んんつ、たか……高瀬、さあん♥ お……おま、んこ……つ、おま  
んこ、きも、ち、いい……つ♥♥」

もう何も考えられない。

うわごとのように繰り返したその瞬間、褒めるみたいに優しいキスが降つてきた。

「……はー、ほんと、かわいい……坂崎さん、初めてなのに、おまんこで気持ちよくなれ  
て、えらいね……♥」

「ん——うう、つあ♡ ん、きもち、い……つあ♡ おまんこ、きもちい……つあ、あ、だ  
め、またくる……つ♡」

とんとんとんつ♡

こりゅこりゅこりゅつ♡

導くように弱いところを突かれて身体が震え出す。勝手に背筋が伸びていく。

もうだめ、もういく——そう思つた瞬間、耳元に触れるほど寄せられた唇が、いいよ、と  
囁いた。

「だめ、あつ、あつ♡ もおいく、たかせ……いく、イ、……つくう、あああ……  
うつつ♡♡」

びくびくびく……つ♡

ぶるぶるつ♡ びくつ♡ ぴくぴく……つ♡♡

今までしたことのないほどの強く深い絶頂に、頭が真っ白になる。  
何度もビクついた身体がようやく落ち着く頃、ぎゅ……つ♡ と抱きしめられて、一気

に力が抜けていく。

「はあ……ふふ、ナカでもイけてえらいね。すつごく可愛かつたです、坂崎さん……」

「……たか、せ……さん、……わ、私……」

「頑張つてくれてありがとう……大丈夫ですか、……坂崎さん？」

「だめ、かも……ごめ……なさ……」

「坂崎さんツ、大丈——」

急激に頭に靄がかかつてきてしまった。視界がぐらついて、声が遠のく。

そういえば私、そもそも結構飲んでたんだった——と思いながらも言うことはできず、そのまま視界がブラックアウトした。

「坂崎さん、坂崎さん……ごめん、僕……、なたが、……あなたの、こと——」

高瀬さんの声が、はつきりと聞こえたのはそこまでだつた。